100 年前にカワセミを撮った男・下村兼史
－日本最初の野鳥生態写真家－

インタビューシリーズ・第 2 弾

「野鳥に気づいて、命のドラマを知ろう」（後編）

ゲスト：安西英明 氏

（公益財団法人 日本野鳥の会・主席研究員）

《コガモ》撮影年不詳 千葉県新浜
撮影：下村兼史　所蔵：（公財）山階鳥類研究所

FUJIFILM SQUARE

目 次

お手入れだって命がけ〈欠かせない羽毛の手入れ〉____ p.3

糞のしかたや暑さ対策 ____ p.6

下を向いて歩こう〈羽が抜けかわる夏はお宝を拾えるかも〉____ p.7

羽からも命のドラマが見える ____ p.10

本プログラムについて

フジフイルム スクエアは、価値の高い写真作品を銀写真プリントで展示し、ご来館者に写真作品との出会いの場をご提供しています。また、作品への理解をさらに深めていただくために、ギャラリートークや講演会等の鑑賞サポート活動に力を入れており、2019 年度には 1 万 4 千人以上の方々にご参加いただきました。

現在は新型コロナウイルスの影響で、写真展会場で行う鑑賞サポート活動は見合わせておりますが、新たな関連プログラムとして、特別ゲストへのインタビュー記事を公式ウェブサイトにて公開してまいります。

ご来館いただき写真展をご鑑賞いただいた方にも、ご来館されておられない方にも写真の魅力を知っていただき、作品制作の背景や意図等への理解を深め、お楽しみいただける機会となれば幸いです。また、本インタビュー記事が写真文化の価値を将来に伝えていくための有益な資料となることを願っています。

お手入れだって命がけ〈欠かせない羽毛の手入れ〉

―― 先日、スズメが水浴びしているのを見ました。暑いと水浴びをするのでしょうか。

安西　鳥は暑い時に限らず、寒くても頻繁に水浴びをするんですよ。水以外に、砂や煙や蟻を浴びる鳥もいます。

―― へぇー、蟻を浴びる鳥もいるんですか。おもしろいですね。

安西　鳥にはダニやハジラミ、シラミバエなどの外部寄生虫が多く、中には羽を食べたり、血を吸うものもいます。

―― それは放っておけないですね。

安西　そこで、浴び行動で汚れとともに寄生虫を取り除き、くちばしで羽を一枚ずつ繕うことで、並びや微細構造を整えながら、腰から分泌される油分を塗っているのです。

―― 油分を塗っているのですか。羽を拭っているだけではないのですね。

安西　微細構造についてはあとで説明しますが、これらの手入れを怠ると健康を損なうし、いざというときに逃げ遅れる要因にもなりかねないのですよ。

―― 大事な行動なんですね。

水浴びするカワラヒワの幼鳥
「成鳥（p.6 のあくびの写真）と違い、胸や腹に斑がある。住宅地にも普通にいる小鳥だが、大きさや体形がスズメに近いので、遠目には色彩がわからずにスズメと思って見過ごされていることが多い」

砂浴びするスズメ（成鳥で、顎と頬の黒斑が濃い）
「スズメは水浴び、砂浴びともによく見られるが、キジの仲間やヒバリは砂浴び専門で、水浴びはしないらしい」

羽繕いするハクセキレイ（成鳥で、幼鳥の頭は黒くない）
「浴び行動に続いて羽繕いが見られる。この写真のように翼に並ぶ、飛ぶための風切羽から
羽繕いを始めて、体の羽の繕いに移行することが多いと思われる」

安西　野生の命には常に天敵がいます。野鳥の場合、猛禽類、例えば、昼はタカやハヤブサ、夜はフクロウ類がいますね。それ以外にも、雑食性のカラス類やカモメ類、モズのような肉食性の小鳥に狙われることもあります。

―― 鳥以外の動物もいますよね。

安西　町の中ならキツネやイタチのような獣は少ないと思いきや、犬や猫が狙うこともあります。瞬時に飛び立ち、逃げのびるには、注意を怠らないのはもちろんですが、羽の並び方や重なり方はもちろん、一枚一枚をベストの状態に保っていることも重要です。

―― 羽の手入れが命にかかわるということがよくわかります。

安西　狙う側の猛禽類にしても、狩りの失敗が続けば飢死してしまうので、必死のはずです。コンマ何秒かが互いの生死を分けることになるでしょう。

―― 厳しい世界ですね。

安西　それから、スズメの水浴びは、14 時台に多いという研究もあるのですが、鳥の種や地域や季節によって違いもあるはずで、詳しく調べられてはいません。

―― 観察するときは、どんなところを見るといいですか？

安西　浴び行動を観察するときは、いつ、どこで、何をどのように浴びているかを見てみましょう。また、浴びの後の羽繕いの順番にも注目してみましょう。いつでも飛び立てるように、まず翼の風切羽から羽繕いを始めるようですが、実際はまだよく調べられてはいないようです。

―― そうなんですね。

安西　頭かきも観察してみましょう。くちばしが届かない頭部の手入れには足を使いますが、写真で示すように２つの方法があります。

―― 頭をかくとき、小鳥やカラスが翼を下げて足を出すとは、知りませんでした。

安西　自立途中の若い鳥の場合は、成鳥と同じような手入れがきちんとできるかどうかも見てみましょう。

―― 若い鳥はどうやって手入れを学ぶのでしょうか。

安西　生理的な行動の基本は本能的なものでしょうが、水たまりで見ていると、１羽が水浴びを始めると周りにいるものがそれにつられるように次々に水浴びしだすことがあります。集団心理のようなものがあるかもしれないし、真似行動が若い鳥の学習に繋がっている側面があるかもしれません。

―― それは興味深いですね。

翼越し頭かきをするムクドリ（成鳥で、幼鳥より色が濃い）
「頭の羽毛の手入れには足を使うが、小鳥やカラス類は、翼を下げて、
その間から足を出す『翼越し頭かき』」

直接頭かきをするキジバト（成鳥で、幼鳥より模様が鮮やか）
「小鳥やカラス類以外では、翼を下げることなくそのまま足をあげる
『直接頭かき』が多いが、カワセミやチドリ類は『翼越し頭かき』」

糞のしかたや暑さ対策

安西　糞をするときに、尾羽をあげる鳥がいます。鳥はよく食べ、よく出す動物なので飛びながら糞をすることもありますが、その際、股を開く、足を前に出す鳥もいます。

―― 鳥によって違うのですね。自然にそうしているのでしょうか。

安西　子供が最初からそうしているなら本能的な行動でしょうが、尾羽や足に糞がかかるような若い鳥が見られるなら、糞の仕方には学習的な要素が要るのかも知れません。

―― なるほど。

安西　また、暑い時こそ観察できる行動が「口開け」です。かつて私が銀座で調べたら、気温が 32 度を超えると、くちばしを半開きにしたままでいるスズメやハシブトガラスが目立つようになり、ヒヨドリやメジロでも口を開けるものがいました。

―― 口から熱を逃がしているのでしょうか。

安西　そうですね。暑くなった体温を口から放出しているものと推測していますが、後に北海道のスズメで調べたら 26 度で口を開けだしたので、地域によっても違うはずです。

あくびをするカワラヒワ（成鳥で、胸や腹に斑紋がない）
「鳥のあくびについてはほとんど調べられていないが、口を開けてすぐに閉じることがよくある。
暑い時はしばらく開けたままでいる」

―― おもしろいですね。

安西　いずれにせよ、日々サバイバルの野生の命には、暮らしや行動すべてに生き残るための術やドラマがあると言えます。

――どんな野鳥でも、どんな場面でも、注目してみたい気になってきました。

下を向いて歩こう〈羽が抜けかわる夏はお宝を拾えるかも〉

安西　夏は、鳥の羽と巡り合うチャンスなんですよ。

―― そうなのですか。

安西　町の中でも、美しい羽が落ちています。都市部に多いハシブトガラスの羽でも手にとってみると、「烏の濡れ羽色」と言われる美しい光沢があるし、駅や公園に群れているドバトや、池や川にいる地味なカルガモにも宝石のように輝く羽があります。

―― 間近に見るときれいですね。

安西　羽の大きさや形、肌触りなどの違いから、体のどこに生えていたか、どんな役割があるかを推理するのも楽しいかもしれません。

―― おもしろそうですね。羽はどんなふうに観察したらよいですか？

光沢があるハシブトガラスの雨覆羽
（細長い風切羽を覆うように上に位置する）

片側が青緑に輝くカルガモの次列風切
（浮かぶための羽で、より細長い初列風切は進むための羽）

安西　翼に並ぶ、飛ぶための風切羽と、ブレーキや舵となる尾羽は比較的大きく、羽の微細構造を観察しやすいものです。微細構造は虫眼鏡で観察できますが、羽軸の横に羽枝、そこからは縦に小羽枝が生え、それらがセットされて一枚の羽を形作っている構造のことです。

―― 羽一枚をほぐしてバラバラにしても、なぞると元に戻るのはそのような構造があるからなんですね。

安西　さらに、軽くてしなやかで頑丈という特質も顕著です。また、水滴を落としてみるとおもしろいように弾くので、油分が塗られていることもわかりますよ。ただし、落ちていた羽を触った後は、石鹸で手を洗っておきましょう。

―― そうですね。念のために、何でも触れたら手洗いを忘れないようにしたいものです。

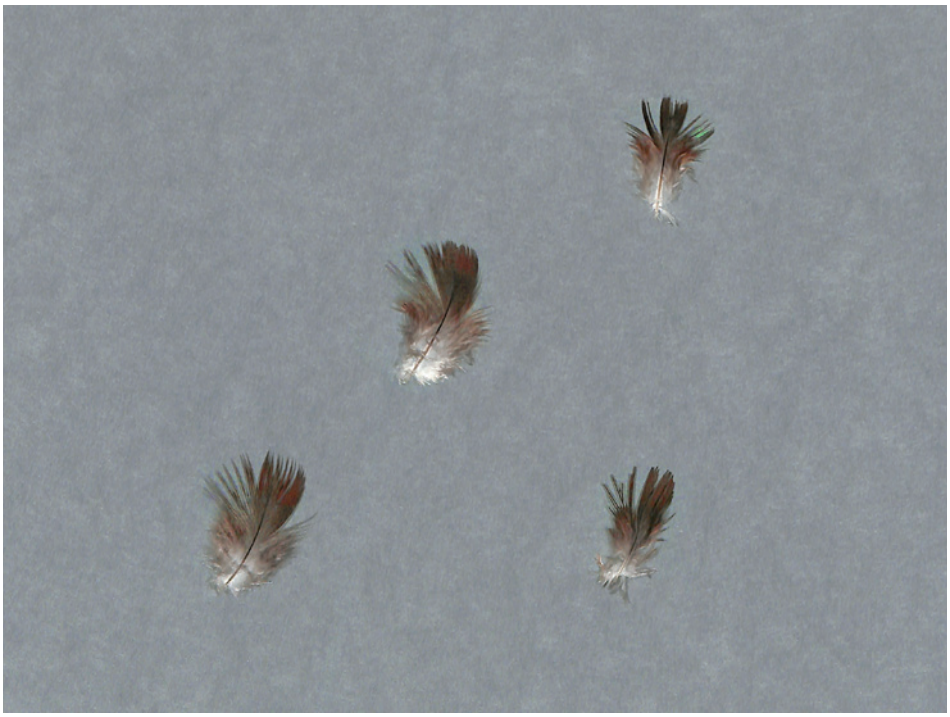
安西　スズメやカラス類では、何枚羽があると思いますか？

―― そうですね、1000 枚くらいでしょうか。

安西　実はわかっていないのですが、ハトの仲間 1 羽で、4715 枚が数えられたことがあるので、カラスなどは 1 万枚くらいの羽をまとっているものと思われます。

―― すごい数ですね！

安西　確かなことは、夏こそ羽が抜けかわる季節ということ。この時期を「換羽期」といいます。



ドバトの羽（緑や紫に光る胸の部分の羽）

換羽中で鼻の穴が見えるハシブトガラス（成鳥）
「換羽は少しずつ進行するので外見からはわかりにくいが、カラス類は上嘴の基部にある鼻孔を覆う羽毛がまとめて抜け落ちる。その一時期だけは普段見えない鼻の穴がよく見える」

――「換羽期」。

安西　生きのびるもののほうが少ない野生の命にとって、命をつなぐことが最大のミッションです。野鳥では春に始まる子育てということになります。

―― なるほど。

安西　その子育てが終わり次第、次の子育てまで生きのびるには、新たな羽をリセットしなくてはなりません。日々の手入れを怠らなかったとしても、悪天候にも耐えて１年を過ごしたような羽は劣化しているはずなんですね。

―― 言われてみれば、確かにそうですよね。

安西　「命育つ夏」に続く「命つなぐ秋」は、野鳥にとっては旅の季節。渡り鳥と呼ばれる鳥でなくても、スズメでさえ若い鳥は西や南に移動することがわかっています。移動先で冬を生きのびることが、春からの子育てにつながるわけです。

―― 命をつなぐとは、そういった繰り返しなのですね。

羽からも命のドラマが見える

安西　生命の進化においては、魚類や爬虫類の時代に鱗（うろこ）であったものが、哺乳類では毛に、鳥類では羽になりました。

―― そうですね。

安西　ケラチンという特殊なたんぱく質でできていること、抜けては生えかわるような基本的な仕組みも同じです。

―― 私たちの毛と同じ仕組みなのですね。羽が抜けかわるには、どのくらいの時間がかかるのですか。

安西　鳥類では繁殖後の１～２か月で、左右対称に少しずつ新たな羽毛にリセットされていきます。その間は、羽の状態が万全でないので天敵から逃げのびられる率が低くなります。また、かなり体力を消耗するようで、活動的ではなくなります。

―― 羽を抜けかわらせるだけでも、大変なことなのですね。

安西　衣食住があって当たり前ではなく、毎日が命がけ、生き残るほうが少ない野生の命にとっては、これも「命のドラマ」の一部なんですよ。

―― 身近にもいる野鳥ですが、知らないことがたくさんありました。「あるがまま」を観察することで、命のドラマを垣間見ることができますね。安西さん、ありがとうございました。

安西　鳥の羽について知るには、次のようなウェブサイトもありますので、ぜひ参考にしてみてください。

日本野鳥の会 BIRDFAN「教えて！安西さん」
https://www.birdfan.net/bw/hint/anzai/016.html
https://www.birdfan.net/bw/hint/anzai/017.html
https://www.birdfan.net/bw/hint/anzai/041.html
https://www.birdfan.net/bw/hint/anzai/061.html
https://www.birdfan.net/bw/hint/anzai/062.html

聞き手：大澤友貴（フォトクラシック）

＊インタビューは特別編に続きます。8 月 20 日（木）掲載予定です。

●ゲストプロフィール

安西英明（あんざい・ひであき）
1956 年、東京生まれ。1981 年、日本で初めてのサンクチュアリ「ウトナイ湖サンクチュアリ」にチーフレンジャーとして赴任する。現在は日本野鳥の会・主席研究員として、野鳥や自然観察、環境教育などをテーマに講演、ツアー講師などで全国や世界各地を巡る。解説を担当した野鳥図鑑は 45 万部以上発行。テレビやラジオなどでも活躍中。
現在、公益財団法人 日本野鳥の会・理事および主席研究員。公益社団法人 日本環境教育フォーラム・理事。苫小牧観光大使。公益財団法人 日野自動車グリーンファンド・評議員。

フジフイルム スクエア 写真歴史博物館 企画写真展
関連プログラム

100 年前にカワセミを撮った男・下村兼史 －日本最初の野鳥生態写真家－

インタビューシリーズ・第 2 弾
「野鳥に気づいて、命のドラマを知ろう」（後編）
ゲスト：安西英明氏（公益財団法人 日本野鳥の会・主席研究員）

展覧会
会場：フジフイルム スクエア 写真歴史博物館
会期：2020 年 7 月 1 日（水）– 9 月 30 日（水）

主催：富士フイルム株式会社
特別協力：公益財団法人 山階鳥類研究所
協力：公益財団法人 日本野鳥の会、有限会社バード・フォト・アーカイブス
監修：公益財団法人 山階鳥類研究所
後援：港区教育委員会
企画：フォトクラシック

記事
公開日：2020 年 8 月 13 日
発行：富士フイルム株式会社　宣伝部
写真提供：金子精一・光江（pp. 3–6）、安西英明（p.9）
編集：フォトクラシック
デザイン：脇野直人

© 富士フイルム株式会社　禁無断転載